



[平成 31 年 2 月 13 日 定例会発表要旨]

縄文人の世界観

手稲郷土史研究会 会員 後藤 崇和



古くは故 梅原猛先生、また近年は大島直行先生の著書と出会い、「縄文人の世界観」に惹かれました。今回は大島先生の視点をもとに、縄文人の精神文化について私なりに考察してみたいと思います。

今から 3~4 万年前に日本に移動して来たホモサピエンスは、これより先には移動できず定住することとなり、1 万数千年前に、この地で確認される最古の土器を作成しました。その文様から、この時代の呼び名は「縄文」と付けられます。縄文時代を代表するものには、世界に誇れる漆の文化、土器、土偶などがあります。これらを作った縄文人が何を感じ、何を考え、いかに表現したのか、それを知る手掛かりとして、土偶に着目していきます。①土偶のワキはなぜ甘い、②なぜ上向き顔でちょぼ口が多いのか、③なぜヘソが目立つのか、④なぜ壊れて出土するのか、この四点について検討したいと思います。

まず、土偶とは何か。土偶は縄文時代の始まりと共に現れ、全国各地に遺されています。よく見ると、どれ一つとして同じものがないほどバラエティに富んでいるのが分かります。この 100 年余、考古学者たちは、乳房や臀部などに女性的特徴を持つ土偶をとくに「女神」「精霊」「地母神」であるとしてきました。そこへ登場したのが、ドイツ人の民族学者 ネリー・ナウマン女史でした。日本を初めて訪れたとき、縄文土器と土偶に出会い、「土偶って何？ どうしてこんな形なの？」。しかし的確な回答を得られなかったため、自身で調べ始め、土偶には「月の象徴」が散りばめられているとの考えに至ったのです。月を象徴するという事は、背景には神話が出てきます。女史は、世界中の神話から「月の闇と光は死と再生を意味している」と読み解いた宗教学者 ミルチャ・エリアーデの研究を援用し、土偶の造形は月をイメージすることによって生まれてくると考えました。月は、闇の朔月から満月まで約 15 日、満月から再び闇となるまでもおよそ 15 日、合計 29.5 日で地球を一周します。世界各地の狩猟採集民族は月を大切にし、また畏れてもいました。潮の満ち干、降雨、女性の月経など、さまざまな自然現象は月と深く関わっていたからです。さらに、神話的世界観が典型的に表れるのは「闇」。朔月から新月までの三日間は闇の世界。ようやく三日月が現れて光が射し、そして満月を経て再び闇の世界へ。その三日後には再び夜空に現れるという月の動き（循環）は、確かに、死と再生の繰り返しをイメージさせます。

そこで、前述 ①の土偶のワキの甘さ（ゆるさ）についてですが、縄文草創期から土偶は作られてきました。最初の頃は顔が無かったり足が無かったりするものもありますが、腕の表現だけは水平に広げた様子が見取れます。ドイツの図像解釈学者 カール・ヘンツエの説によると、ワキは闇を象徴すると同時に光を隠すものなのだから。そこから、土偶のワキの甘さの謎には、闇から光を待望しているのではないかという答えが導き出されます。ちなみにワキは、解剖学の世界では腋、「月（にくづき）に夜」と書きます。



「縄文のヴィーナス」として
人気の高い 国宝土偶
茅野市尖石縄文考古館 所蔵
(同館 提供写真)

ふだん私たちが使うのは「カ三つ」の脇のほうが多い。漢字からも、「腋」は闇の世界を象徴しているように感じられませんか。

②に絡んで、ネリー・ナウマン女史は、様々な造形がありながら土偶はいくつもの共通した特徴を持っていることに気がきました。例えば、ちょぼ口で上向き顔の土偶が多く出土しています。沖縄 宮古島の月にまつわる神話に、地球を見ていた月の神様が、毎日人間が死んでいくのは不憫なので人間のために死なない水を授けようとするものがあります。使いの蛙に“生きる水”と“死ぬ水”を持たせて地球へ行かせたのですが、運んでいる途中、蛇に“生きる水”を飲まれてしまいます。人間は“死ぬ水”を飲んだために寿命が尽きると死んでしまいますが、“生きる水”を飲んだ蛇は脱皮を繰り返し生き続けるのです。これは宮古島に限らず、世界各地にある伝承です。神話的な世界観を持ったときにこういう発想が出てきます。縄文人も現代人も動物も植物も、水がないと生きていけません。水が何処からやってくるのか、非常に大事なことでした。当時の人々は、月が雨(水)をもたらすと信じていたのでしょう。狩猟採集民族に広く伝わる自然観であり、その中に現実の暮らしがあります。女史は、土偶の顔が上向きだったり、ときに盆のようにえぐれていたりするのは、月の水を集めるためだったのではないかと考えました。ちょぼ口は、大切な月の水を体に溜めようとしているのかもしれません。

③について、人間の中心はヘソです。お母さんのおなかにいる赤ちゃんは臍^{へそ}の緒から栄養をもらっていますが、人間にとって最も大事なものであることを縄文人も知っていました。さらに土偶をよく見ると、ヘソから首や乳房に向けて線が引かれているものも多くあります。ナウマン女史は臍の緒と乳房を結んだのでは、と考えています。人間が生きるために必要なモノをこのように目立つように作り、線でつないだのではないのでしょうか。

④の土偶は自然に壊れたのか、それとも故意に壊されたのか、それにより考え方が全く変わります。壊されたという説の根拠として、人をバラバラにしてそれを畑に撒くと、やがて植物が生まれてくるといって東南アジアを中心に伝わる「ハイヌエシ神話」を挙げる学者がいます。これになぞらえて、神が宿っている土偶を壊してばらまくと、そこから植物や動物が生まれると考えるのです。ただし、これは農耕社会の見方で、狩猟採集社会には当てはまりません。一方、土偶のある部位を壊すことによって、病気や怪我を癒そうとしたのではないかと、という考えも提案されています。これは今も民間信仰などに残っていますが、大島直行先生は、この件には答えを出していません。

多くの科学者は 神話は非科学的なものだと捉えています。神話には縄文人の精神文化の本質に触れるものが隠されているように思います。神話を読み解くことも大切なのではないのでしょうか。

現在、北海道では 国宝の「中空土偶」(愛称:カックウ)をはじめとする「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録をめざす取り組みが盛り上がりを見せています。私たち手稲郷土史研究会にとっては、手稲前田から出土した縄文中期～縄文後期の土器も馴染み深いものです。これからも縄文人の世界観をさらに探究していきたいと思えます。



★「手稲歴史資料展示コーナー」のお知らせ 手稲区役所1階 情報提供室の『手稲歴史資料展示コーナー』では、2月から「手稲の動物」をテーマにパネル展示をしています。これは、手稲郷土史研究会の村元健治会員が協力したものです。どうぞご覧ください。

★定期総会のご案内 手稲郷土史研究会の平成31年度定期総会を、4月10日(水)午後6時より手稲区民センター2階 第1・第2会議室で開催します。会員の皆さんはご参集ください。



国宝 中空土偶
函館市縄文文化交流センター 所蔵
(函館市HPより転載)